九州支部だより
第 29 回九州支部研修会　印象記

山川　博文[*1]，永元　啓介[*2]

令和 7 年 9 月 12 日（金），お彼岸を迎える時期に，熊本大学山崎記念館にて第 29 回九州支部研修会が開催された。昨年度は 11 月の開催であったが，今回は季節を移し，秋の気配漂うなかでの実施となった。形式は前年度と同様に対面とオンラインを併用したハイブリッド方式で，対面 15 名，オンライン 27 名が参加し，多方面からの関心の高さがうかがえた。

研修会は「地方で不足する放射線取扱主任者人材の現状と展望」と「強みを活かした特色ある放射線施設運営」の二本立てで構成され，前半は主任者人材不足という全国的にも喫緊の課題を取り上げ，地方大学や医療施設における現状と今後の方向性について議論が行われた。後半は「強みを活かした特色ある放射線施設運営」をテーマに，2 人の先生からご講演をいただいた。

講演 1「地方で不足する放射線取扱主任者人材の現状と展望」

1-1　次世代主任者育成のはざまで

杉原真司氏（大分大学）

杉原先生は九州大学で主任者としてご活躍された後，現在は大分大学にて非常勤で主任者業務に携わっておられる。先生は約 10 年前より支部研修会にて「次世代主任者育成プロジェクト」と題して講演等を実施され，後進の育成に尽力されてきた。本講演では，RI の利用減少や施設の廃止，人材育成の機会の縮小といった課題がある中で，ネットワーク型の共同利用・研究拠点への転換や，短寿命 RI を活用する新たなユーザー層の開拓が重要になるとの指摘は，今後の方向性を考えるうえで非常に示唆に富んでいた。更に印象的だったのは，これらの課題に対応する主任者の役割が大きく広がっている点である。従来の専門的知識だけでなく，安全管理担当者やマネジメント層との連携，更には現場での柔軟な対応力も必要とされるという点は，主任者像が変化しつつあることを実感させられた。支部研修会が，そうした時代に対応できる主任者を育てる場として，今後も継続していくことの重要性を改めて認識する機会となった。

1-2　OIST における放射線取扱主任者の現状について

棚原朗氏（琉球大学名誉教授）

棚原先生は，OIST（沖縄科学技術大学院大学）において業務委託という形で主任者業務に従事され，昨年度末の施設廃止後も，OIST で主任者として外部施設利用者向けの教育訓練や放射線業務従事者に関する手続き等，管理支援業務を続けておられる。OIST では，教員・学生の半数以上が外国人であり，多くの研究者が海外の RI 研究施設を利用する。そのため，被ばく管理をはじめとした対応では，日本と海外の異なる法規制や基準を踏まえ，柔軟に工夫しながら実践している点が印象的であった。主任者業務を業務委託という新たな形で担う取組みは，主任者不足が深刻化する中で有効な解決策の 1 つであり，こうした柔軟な働き方が今後更に広がっていく可能性を感じた。

1-3　岡山大学における学内 RI 施設の全学的運用について

寺東宏明氏（岡山大学）

寺東先生のご講演では，岡山大学内における RI 施設の全学的運用に関する取組み事例が紹介された。岡山大学では，過去 10 年間で業務従事者数は

大きく変わらないものの，学内 RI 施設の稼働率が低下し，外部施設の利用者が増加している。こうした傾向は多くの大学で共通しており，予算や人員の減少といった厳しい課題が浮き彫りになっている。特に印象に残ったのは，岡山大学が計画する技術職員のローテーション制度だ。安定的に在籍する技術職員を学内の RI 施設を交代で担当させることで，管理業務の均一化を図ると共に，各施設の運営経験を積ませて効率的な人員運用を目指しているという。この取組みは先進的であり，今後の成果や課題に注目したい。

講演 2「強みを活かした特色ある放射線施設運営」
2-1　熊本大学アイソトープ総合施設の施設利用展開
後藤裕樹氏（熊本大学）

後藤裕樹先生からは，生命資源研究支援センターに所属する熊本大学アイソトープ総合施設が，研究・教育・支援の三位一体体制で RI 利用を推進している現状が紹介された。研究では，悪性腫瘍の転写因子制御の病態解明や，腫瘍モデルマウスを用いた新規放射免疫療法の共同研究が進められている。教育面では，学部・大学院教育に加え，医学部学生を 2 か月間受け入れて研究発表にまで導く実践的なプログラムを実施していることが強調された。また，AI を用いた主任者試験問題の検証から，人間の判断の重要性が示された点も興味深かった。更に国際共同研究や放射線管理への全学的な貢献についても触れられ，今後の発展が期待される内容であった。先生が指摘された学生のレスポンスの温度差は，基礎配属を担当する立場からも強く共感でき，医学部教育の難しさとその重要性を改めて感じさせられる講演であった。

2-2 放射線施設の多様な強みと放射線セキュリティーリテラシー
松田尚樹氏（前放射線安全取扱部会部会長）

元長崎大学であり，現在も原子力規制庁放射線審議会委員，航空機乗務員等の宇宙放射線防護検討部会長，九州電力の安全性・信頼性向上委員会委員等数かずの要職を務める松田尚樹先生からは，RI 施設をテーマとしたユニークなご講演があった。松田先生は全国各地の RI 施設を実際に訪問され，それぞれの設立の経緯や母体学部の特色，施設の使命や使用核種の違い，さらには管理者の個性や地域性が織り交ぜられて形づくられる多様な姿を紹介された。その語り口は，旅先での料理や地酒のエピソードを交えたユーモラスなもので，参加者を強く惹きつけた。2024 年と 2025 年にそれぞれ 5 か所を訪問され，その知見を披露いただいたが，各施設の成り立ちや運営上の工夫，研究者や技術者の努力に裏打ちされた実態は極めて示唆に富むものであった。今後も新たな施設を訪問され，これまで知られてこなかった知見や工夫を紹介いただけることが大いに期待される。

写真　研究会を終えた会場参加者と九州支部委員

両先生のご講演を通じ，放射線施設の運営には普遍的な課題がある一方で，地域性や人材の創意工夫により新たな可能性が切り拓かれていることが示された。日頃は各現場に閉じがちな取組みを，このような場で共有し，議論を深められることこそ，本研修会の最大の意義であると実感した。

最後に，研修会後の参加者アンケートでは，全体の満足度が 5 段階評価で平均 4.2 と良好であった。特にハイブリッド開催への評価が高く，今後も継続を望む声が多く寄せられた。研修会が単なる情報提供にとどまらず，参加者一人ひとりの学びと交流を支える場であることを裏付ける結果といえる。

本研修会で得られた知見とネットワークを各自の現場に持ち帰り，次年度以降の取組みへつなげていくことが期待される。

（*1 福岡大学　RI センター実験施設，*2 産業医科大学　産業生態科学研究所　放射線衛生管理学）